

月刊

みんな ねっと

9
2018

●特集●

苦しみを負う子と母と（下）（長汐道枝）

●新連載 語りあおう、つながろう、町の中で、日常の中で
～ハウジングファーストに学ぶ 経験から作る新しい地域モデル～第6回（水口恵理）

■続・事例からみる精神障害者の障害年金の実際（白石美佐子）「再び障害年金受給者の支給停止について」

■知ることは生きること（青木聖久）連載33回《自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集⑫》
兄弟姉妹の立場であると共に支援者でもある私の宣言



お知らせします みんなねっとの活動 2
平成29年度全国調査より見えること②
日中「何もしていない」人々の実態（杉本豊和） 5

特集 **苦しみを負う子と母と（下）**
（スクールソーシャルワーカー）長汐道枝 8

語りあおう、つながろう、町の中で、日常の中で
～ハウジングファーストに学ぶ 経験から作る新しい地域モデル～（第6回）水口恵理 14

続・事例からみる精神障害者の障害年金の実際
《6》再び障害年金受給者の支給停止について（白石美佐子） 18

多事彩々『子』の声を集めて」（野村忠良） 22

街の診療所からのお便り【連載136】（増本茂樹）
…病名を“統合失調症”にするか“発達障害”にするか… 24

知ることは生きること（連載33回）兄弟姉妹の立場であると共に支援者でもある
私の宣言《自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集②》（青木聖久） 28

真澄こと葉のつれづれ日記（第89回） 34

みんなのわ——読者のページ・地域の話 36

感想・意見・投稿を募集しています

メールでの原稿募集を始めました。
アドレス：minnanet.seishinhoken@outlook.jp
・「みんなのわ」コーナー（300～350字程度）
・「地域の話」コーナーへ皆様の原稿をお寄せ下さい！（1000～1200字程度）

お知らせします みんなねっとの活動

■交通運賃割引要望活動

7月20日、交通運賃割引の要望活動として、本條理事長、奥田理事（交通運賃割引推進プロジェクトチーム座長）、屋敷和歌山県連会長、大島前和歌山県連会長が、自民党二階幹事長との面会のため、自民党会館を訪問しました。

あいにくこの日は、国会で内閣不信任案が提出され、すべてのスケジュールに優先して審議されるとのことで、二階幹事長本人にはお会いできませんでした。代理として二階幹事長秘書で息子さんの二階俊樹さんが約30分にわたり対応してください

ました。また、国土交通省鉄道局に面会の手はずを整えて、同行もしていただきました。

国交省では藤井直樹鉄道局長にお会いして、交通運賃割引の実施について40分ほど意見交換をすることができました。昨年からは西日本鉄道で交通運賃割引を実施していますが、この動きを徐々に広げていくことが大切であり、国交省としても、やさしい社会づくりという観点から何ができるか検討してみたいとの前向きなお話をいただきました。以前は、JRも含めて民間企業の独自の判断で割引を行っており国交省から指導するといふことはできないとの姿勢で、厚労省で助成金を出すような仕組みを要望してはどうかなどと

いう対応でしたが、それに比べると隔世の感があります。

また、今回の要望活動は、和歌山県新宮市議会との共同行動として実施されたものです。新宮市議会では精神障害者の運賃割引を求める決議を行っており、関係各省市庁や政党などにも働きかけを行っているとのことで、地元の県議会議員の濱口太史さんや、新宮市議会事務局、和歌山県東京事務所からも職員が参加しました。



平成29年度全国調査より見えること②

日中「何もしていない」人々の実態

白梅学園大学 杉本豊和

前回に引き続き、平成29年度家族支援調査結果を更に掘り下げてみたいと思います。

日中何もしていない人々

今号では、日中の活動状況を聞いた問いでご本人が「特に何もしていない」状態であると回答された20・2%（576人）の方についてみていきたいと思えます。これらの人々は正確にはデイケアや通所施設、訪問看護等に結びついていない状態の人々です。

性別では男性44・7%（全体

62・2%）、女性55・3%（同37・8%）であり、全体データと比較すると、性別の割合が逆転し女性が多くなっています（図表①）。

平均年齢は45・1歳（±11・7）と全体データとほぼ同じです。

主な病名では統合失調症が34・5%と最も多くなっていますが、全体データの80・3%と比較すると半分以下となっています（図表②）。

それに比して多くなっているのは、24・8%の発達障害で21・1ポイント多くなっています

す（図表③）。主なものの以外の病名では、双極性障害が25・2ポイント上回っています（29・8%）（図表④）。

医療の利用状況

医療の利用状況では、外来61・4%、入院10・1%、3ヶ月以上利用中断中5.8%、利用終了7.2%でしたが、「その他」が15・5%（120人）という結果であり、これらの人々の状況が人数も多く気になるところです。自由記入欄では、「家族が代わりに薬を貰いに行っている」「本人の受診拒否」「手帳の更新時のみの受診」などの回答がありました。

苦しみを負う子と母と

下

ながしおみちえ
スクールソーシャルワーカー 長汐道枝氏



先月号と今月号は、東京都府中市教育委員会のスクールソーシャルワーカー^{ながしおみちえ}長汐道枝氏のお話を上・下の2回にわけて紹介しています。精神障害などの深刻な問題で苦しんでいる母親と子どもへの、学校を中心とした心温まる支援の様子をお話しくださりました。以下、お話しくださった内容を要約してお届けいたします。

◆「おいさ」を求めたもの

中学生の「非行」の子どもたちは、府中市全域の学校を跨いで「桜居咲（おいさ）」という組織を作っていました。絶えずブログに自分の所在や行動をアップし、仲間の絆を強めていました。

一見、怖そうな「非行少年少女」達は、率直でとても情の深いところがあり、鋭い感性を持つていました。私は話しているうちに自分の浅はかさを恥じることが多々ありました。彼らにはホンネしか認めない厳格さがありました。幼少期から大人の都合に振り回され、愛に飢え

てきた子がとても多かったから
でしょうか。

子ども達の家庭をみると、ア
ルコール依存症やDV、虐待、
母の家出、浮気、精神疾患、等々
の家族環境がありました。そんな
環境にめげることなく強気で
つっぱる子たちが、同じ悲しさを
共有する仲間と作り上げたのが
桜居咲だったと思います。

「うわべ要らない」という一
言は、親や教師の世間体やごま
かしを見抜き、激しい反抗心を
呼び起こしました。差別感をも
つ優等生は、恰好のいじめの
ターゲットとなり、暴力をふる
って結局、補導・逮捕、隔離
ということになりました。

また若くして母になったF

ちゃんの子育てを桜居咲の仲間
が手伝い、想像をこえるきめ細
やかな愛情を注いでいる姿に感
動しました。

『紫の青春』という著書の中
で自らの非行体験を書いている
中村すえ子氏（当時府中在住）
からは、非行からの立ち直りに
ついて、本人と環境の両面で、
多くの貴重なお話をお聞きしま
した。彼女は少年院の出院者達
で「セカンドチャンス」を作り、
子どもたちの立ち直りを支えて
います。

出席停止処分になった中学3
年生を都営の集会所を借りて学
習支援をしていた時には、セカ
ンドチャンスのメンバーに交代
でご指導していただきました。

◆活動の原点

私は、大学の教育学部で発達
心理学を学び発達支援に関わる
仕事がしたいと思い、障害児教
育の道を選びました。当時、障
害の重い子ども達は公教育が受
けられず就学猶予免除にさせら
れた時代です。1974年、美
濃部都知事を誕生させた世論の
盛り上がりに乗って、すべての
障害児の学校教育が実現しまし
た。「希望者全員就学」5年後
には、国も渋々「養護学校の義
務制」を実施し、弱者の強い思
いが大きな力となって閉ざされ
ていた重い扉を開けることがで
きました。

語りあおう、

つながろう、

町の中で、

日常の中で

訪問看護ステーション KAZO^{かぞっく}C

板橋チーム 看護師

水口恵理

ハウジングファーストに学ぶ
経験から作る新しい地域モデル

第6回



グループホームの
皆さんと誕生日会

私と訪問看護との出会い

訪問看護ステーション KAZO^{かぞっく}C

で働き始めて、もうすぐ3年目。
私のスタートは、あまり馴染みの
なかった土地、板橋区を拠点
とした活動からでした。

板橋区は、人口は約50万人に
対し、精神科病院の病床数が約
2千床と、東京都23区の中で最
も人口対病床数が多い地域です。
そのため、精神疾患を抱えて地
域で生活をしている人も多く、
その中には医療や地域のコミュ
ニティと関わるのが出来ずに、
たった一人で悩みを抱え込んで
いる方が多くいることを予測し
ていました。

はじめての訪問先は、グルー

プホームに入居されている方もとでした。引越しをされたばかりとのことで、段ボールが数箱積みあげられ、室内には遺影の置いてある仏壇とヤニで汚れたテーブル、その上には煙草の吸殻と小銭が散乱していました。また、流し台にはレトルトカレーのゴミが散乱していて、飛び回っている虫を私は目で捉えることができました。通院先の病院からの情報が心もなかつたため、まずは「はじめまして」のご挨拶から、私はかわりをはじめてみようと思いました。

病院に勤務していた時代には、患者様の病歴や生活歴、家族構成などをワーカーさん（精神保健福祉士）や主治医、入院受け

の看護師が作成したカルテを元に、かわりをしていくことが基本であった私にとって、「はじめまして」のご挨拶から流れる状況は、とても新鮮な響きを感じました。はじめは「看護師」という肩書きにとらわれて、情報のない患者様にどのようなかわれば良いのか戸惑い、悩むことがありましたが、素の自分でかかわることを意識しはじめからは、段々と和らいでいく感覚がありました。話をしている気がついたこと、それは、目の前にいる方は医師の指示など治療方針に合わせて服薬や治療を行っている「患者様」ではなく、地域で暮らし自分を主人公に生活を送られている「利用者さん」

でした。そこには一人ひとりの個性、様々な環境、本人らしい生活から生まれる心の豊かさがあり、「自分の人生の主人公」というKAZOCの理念に通ずるものがあると、私は当時から今まで思い続けています。

関係性の中のオープンダイアローグ

「お薬は飲んでいますか？」というフレーズは、私がよく耳にしてきた言葉です。この問いかけに対して、相手からは「はい」と返事が返ってきます。私はこの流れが、果たして正直な返答を引き出しているのかどうか、疑問に思うことが多くあります。突然やって来た見ず知らずの医

療従事者に問われたら、私は「はい」と言わざるを得ない雰囲気を感じてしまいます。飲んでいてもいなくても、調子が悪くてもそうでなくても、目の前にいる方の心の声を聴こうとしなければ、きっと本当の答えは返ってこないように思います。私たちは白衣を身にまとわず、自分らしいスタイルで訪問に伺わせて頂き、目の前にいる相手のことを思いながら、ゆっくりと対話をはじめていく。安心して話せる空間を提供していくことを念頭に置き、ことばには表れない思いがあることを常に意識して、相手に寄り添っていく。医療者、利用者と枠にはまった関係性では、不必要な上下関係が

意識されてしまったり、ありのままの相手を知る機会を逃してしまう。同じ人間であり、同じ空気を吸っていることに変わりはない。私は、同じ目線で対話を重ねていくこと、つまりオープンダイアローグの実践こそが、精神科訪問看護においてとても大切なことであると考えています。

グループホーム(共同生活援助)の立ち上げ

訪問看護を続けていく中で「一人でいるのが辛い、苦しい」との悩みを抱える利用者さんからの相談が続いていました。作業所等への通所には不安が強くて一歩を踏み出せず、家族も本人との同居が難しい状態にある。

また、入院はしたくないとの思いから、病院側はどのような支援をすればよいか分からない状況がありました。ただ、訪問看護(私)との関係性が保てている状況があり、何か利用者さんにとっての居場所作りができれば検討した結果、世話人のかわりがあるグループホーム(共同生活援助)を立ち上げるというアイデアが浮かびました。

私たちがはじめたグループホームは5部屋のアパートタイプで、交流室で入居者と世話人がともに同じ時間を過ごすことを大切にしています。

また、入居者に対して訪問看護による支援も密に行い、医療的な側面からも支援を続けられ



利用者さんの四コマ漫画

るように、世話人と連携を取りながらその人らしい人生を維持していくお手伝いをさせていただいています。

日常に溢れる対話の芽生え

どのように暮らしていて、どんなことに興味があり、どのことで悩まれているかを、オープンダイアログを通して感じられるようになり、私は利用者さんとの対話を重ねていくことで

生まれる信頼関係を、とても大切に思っています。情報交換や聞き出すだけの会話には表れてこない、ことばの奥に潜む心の声に耳を傾けることが、私にとつての対話の入り口です。支援をする立場として必要なことは、ご本人の些細な表情、声のトーンや目の動き、呼吸のリズムやちよつとした仕草に対し、敏感に感じ取れるアンテナを張っていくことだと私は思います。は

じめて利用者さんと対面したとき、そこにオープンダイアログのエッセンスが加わることで、対話は芽生えていく。

おわりに

現代はIT化が進み、多くの情報で溢れている情報過多の時代となっています。情報に溢れる現代は生きにくく、変化にについていくことの困難さを感じることも多くあります。そんな変化の時代の中で、利用者さんの語ってくださる言葉に耳を傾け、心に寄り添い、日々の生活の小さな支えになれるように、これからも対話のある訪問を続けていきたいと思います。

(みずぐち えり)

続

事例からみる 精神障害者の 障害年金の実際

白石社会保険労務士事務所
社会保険労務士

しらいし みさこ
白石 美佐子

《6》再び障害年金受給者の支給停止について

8月号にも記載していますが、障害年金の打ち切り（支給停止）のことについて今月号も触れておきたいと思います。

厚生労働省は、障害基礎年金の受給者の打ち切り（支給停止）の問題について、精神、知的障害者は検討の対象に含まれていないとしました。

等級判定ガイドラインの規定により、今回の打ち切り（支給停止）に該当しないとしましたが、本当にそうでしょうか？

20歳前の障害基礎年金の72・7%が、20歳以後の障害基礎年金の45・2%が精神の障害とされています（表1）。

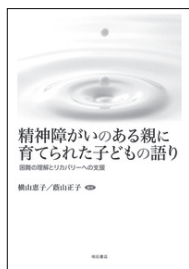
日本年金機構が「障害の程度が軽い」とした1010人につ

いて厚生労働省は、診断書の記載された障害の状態は、前回の更新時と変わっていないかったとして救済を決めました。そして、14・4%の人たちに対しても、支給停止を取り消して遡って未払い分を支給することとしています（表2）。

精神が、救済の対象とならなかったのは、1件も前回と同様の診断書でなかったと解釈できません。本当にそうでしょうか？

厚生労働省がサンプル調査した実際の診断書を私たちは見ることができませんから推測でしか判断は出来ません。

これらの方々が、皆、病状が寛解したのであれば問題はないと思います。



『精神障がいのある親に育てられた子どもの語り』(明石書店)



「子」の声を集めて

外からは見えにくい苦労を負って、懸命に生きていらっしゃる方たちがいます。親に精神障害がある子の立場の方たちです。

その方たちの声を集めて、本が出版されました。現在23歳から50歳までの成人の方々、合計9人の声が掲載されています。書名は『精神障がいのある親に育てられた子どもの語り』です。(横山恵子・蔭山正子編著 明石書店 2017年12月初版発行)

「私は私を肯定する理由や保証がほしいのです。なんのために生まれてきたのか、知りたかったのです。この問いに答えがないことにやりきれない思いでした。親の愛を求めてももらえません。期待は私の心を傷つけます。どうしたら愛されるのか、誰か教えてほしいです。なんの権限もなく、無力な私は何のために生きてるんだろうと思ってしまうのです。(中略) 外側の自分は笑っていて、内側の私は泣いています。誰にも頼れず悲しむ本当の内側の私は、いつも助けを求めています。それなのに甘え方や頼り方、弱さの見せ方を知らない外側の私が内側の自分を閉じ込めてしまっています。私も、同世代のみんなど同じように、心の底から『楽しい』『幸せ！』って言いたいし、感じたいです。(城所まいさん、23歳女性 母が統合失調症)——本書71頁より転載

子どもびあ

精神疾患の親を持つ子どもの会 愛称：こどもびあ

「こどもびあ」は精神疾患の親を持つ、成人した子どもたちの会です。精神疾患の親に育てられた子どもは少なくなく、親の疾患にどう対応したらいいのか、誰に相談したらいいのか分からず、ひとりて悩んでいる子どもたちがたくさんいます。そうした方々に「ひとりじゃないよ」ということを伝えるときも、ともに向き合い、ともにリカバリーしたいと思いい「こどもびあ」を立ち上げました。私たちは必要な時に寄り添い、助け合える会をめざしています。また「こどもびあ」は、未成年の子どもたちへの直接支援も模索し、少しずつ活動を始めています。私たちの存在を多くの人に知ってもらうことで、幼少期・学童期・思春期の子どもたちがSOSを発信しやすくなり、身近な大人が手を差し伸べることで、子どもたちが支援される社会になることを願っています。

なかにへ(子どもの立場の方へ)

初めまして、こどもびあです。こうやって出会えたこと、とても嬉しく思います。精神疾患の親を持つ子どもたちが集まれる場は少ないのが現状です。友人や周りの大人に助けを求められなくて孤立していた私たちも、こどもびあを通してなかと出会いました。ひとりでは乗り越えられない過去や現状も、なかと語り合う中で向き合うことができています。すぐに何か解決できる訳ではないけれど、いまあなたの抱えている辛さや不安を少しでも和らげるようにお手伝いできればと思っています。心の準備ができれば私たちこどもびあの活動に参加してみてください。いつでもお待ちしております。

支援者へ

専門職に限らず、手を差し伸べようと思ってくれる方、どなたでも支援者だと思っています。いまの社会では家庭内に介入する事は難しく、子どもが抱える家庭内問題は特に見えにくいのが現状です。さらに、精神疾患・障害についての理解も乏しく、家族の精神的な不調をオープンにできない現状も相まって、孤立した環境ができてしまいます。私たちの存在を知ってもらうことで、ひとりでも多くの成人した子どもの立場の家族をこどもびあに繋げていただければと思います。支援者が参加できる機会もありますので、是非ご参加ください

こんな活動をしています

家族学習会
(1クール全5回)
みんなねつと(家族会の全国組織)と共催
子どもの立場だけが参加できる学習会です。同じ立場の担当者が3~5名入り、全体で15名以下のグループで、テキストに沿って進行していきます。幼少期~現在、将来のことまで、それぞれの体験や想いを語り合うことで「私たち子ども自身が元気になること」を目的としています。同じ立場のなかと出会い、語り合う場として開催しています。

つどい
(2~3か月に1度)
子どもの立場だけが集う場です。いままで家族会に参加したことがない方、体験を語り合う場ってどういう所?と不安な方、こどもびあに興味を持った方、子どもの立場であればどなたでもご参加いただけます。小グループに分かれて自由に想いを語り合う時間も用意しています。同じ立場の人の体験談を聞いてみたい、ひとりて悩んでいたことを誰かに話したい、そんな思いを持った方のためのつどいです。

体験発表
様々な場で子どもの立場としての体験を発表しています。体験発表を通して、誰にも相談できずにひとりて辛さを抱えている方やそういう子どもたちを助けようと思っている方たちに想いを届けています。また、体験発表をすることで当時の出来事、気持ちの回復(リカバリー)にも繋がっています。

この問題に長年、献身的に取り組んでこられた二人の専門家が、子の立場の家族たちの声をもとにして、彼らの人生の様々な体験を整理しています。また、大人になっている子たちのリカバリーについて触れられ、さらには新生児から学童期までの間に、地域の社会資源を使って子どもを支援する方法が提案されています。終わりの章では、これからの展望として、患者とともにその家族も支える支援、大人になった子への支援として「家族による家族学習会」の活用が提案されています。

(野村忠良)

ぜひ、ご一読を！

*「精神疾患の親を持つ子どもの会」のホームページは、「こどもびあ」で検索、または URL : <https://kodomoff.amebaownd.com/>



精神疾患の親を持つ子どもの会

こどもびあ
URL : <https://kodomoff.amebaownd.com/>
E-mail : kodomoff@gmail.com

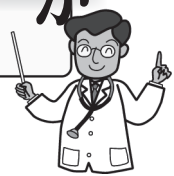
Facebook: "こどもびあ" で検索 Twitter: "こどもびあ" で検索

こどもびあ大阪
URL : <https://kodomoff-osaka.amebaownd.com/>
E-mail : kodomoff.osaka@gmail.com

地方でこどもびあの活動を開始したい子どもの立場の方はご相談ください

街の
診療所から
のお便り

…病名を統合失調症にするか
発達障害にするか…



連載
136
回

ましもと しげき
増本 茂樹
増本クリニック院長

〈怖い患者〉

「それじゃ、先生はA病院と同じ薬は出せんと言うんかね？」と、この日初診のLさん（38歳男性）は大きな声で言われます。Lさんは近くのA総合病院からの紹介状を持って受診されます。

この病院の精神科は通いの医師によって週1回の診療がされていたのですが、今この地方は

医師不足が進んでおり、このたび精神科外来を閉鎖したのです。

それで、Lさんは私のクリニックにやって来られた。紹介状には、高校を卒業して土木の会社で働いていたころ、会社で被害妄想と興奮状態を起こし、B精神科病院で統合失調症と診断されて短期間の入院治療をしたこと、その後はC総合病院精神科を経て、最近A病院に通院していたことが書かれていました。

〈同じ薬が必要〉

今、あなたはどんなことに困っていますか？ この薬はどんなふうに効いていますか？

「もう、ずっと同じ薬を出してもらっているのだから、今の薬でいいです」と、Lさんの大声が響きます。

Lさんは体格ががっちりしていて、顔はいかついのです。ですから、大きな声を出されると、

私もちょっと怖いような感じで、身構えてしまいます。でも、前医がしさんに処方していた薬は、抗精神病薬のレボトミン25mg錠が朝と夕食後に1錠ずつの少量でした。そこで、第1回目は紹介状の通りの薬を処方し、本人の希望される頭痛の頓服と下痢止めを持って帰ってもらいました。

精神科医は、この先突っ張りあうことを予想して、気が重いことでした。

＜頭痛薬がうん＞

しさんは2週間ごとの通院でしたから、次の受診は2週間後でした。前回と同じに大きな声でしたが、表情の硬さが和らい

でおられました。そして、「今度の頭痛薬も良く効いた」と言われました。



この時の話で、頭痛薬の処方に関して、しさんの「もつとたくさん出してくれ」という希望と、前医の「そんなにたくさん処方できません」という、ちよつとこじれたやり取りが続いていたと分かりました。

頭痛薬には、毎日3回とかを続けて飲んでいく癖になってしまい、薬を飲まないでいるとかえって頭痛がひどくなってしまうという性質があります。でも今回は2週間で10錠でしたから、その心配はないようです。と伝えました。

＜パニック＞

どうやらしさんの一番の心配は、今度の精神科医が頭痛薬を

知る(こと)は生きる(こと)

連載33回

兄弟姉妹の立場であると共に
支援者でもある私の宣言
(自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集⑫)

日本福祉大学
みんなねっと理事 青木聖久

今回ご紹介をするのは、風間真さん(仮名・40歳代男性)です。今から11年前、私は就労継続支援事業所の管理者をしている風間さんと出会いました。当時、私が今の風間さんの年齢で、風間さんは20歳代でした。

その時の風間さんの印象は、明るく、快活で、一所懸命な青年。その後も、何度か会う機会があ

りながらも、風間さんの歴史について知ることはありませんでした。そのような中、昨年ある雑誌に、「お姉さんが精神障がいを持つている」という風間さんの記事が私の目にとまったのです…。

周囲の評価とは裏腹に苦しかった小学校・中学校時代

風間さんは元来、真面目な人

柄。そのこともあり、周囲から評価され、小学校・中学校では学級委員を担っています。また、中学校ではバスケットボール部のキャプテンにもなりました。ところが、風間さんは実のところ、皆の模範になったり、まとめるということが苦痛だったのです。でも、逃げてはいけないう一心で、無理やり頑張っていたと言います。

そのようなことから、今でも、小学校・中学校時代には二度と戻りたくないそうです。とはいえ、風間さんは一度取組み始めたことは貫徹かんてつしたいという気持ちと、負けず嫌いの性格から、将来はバスケットボール選手になれたら、という夢を持っていました。

★ 真澄こも葉の ★

第89回

つれづれ日記★

試験まで一ヶ月をきった。



マンガが一段落して（しめ切が終わって）資格の勉強をしている

できなくて困っている。



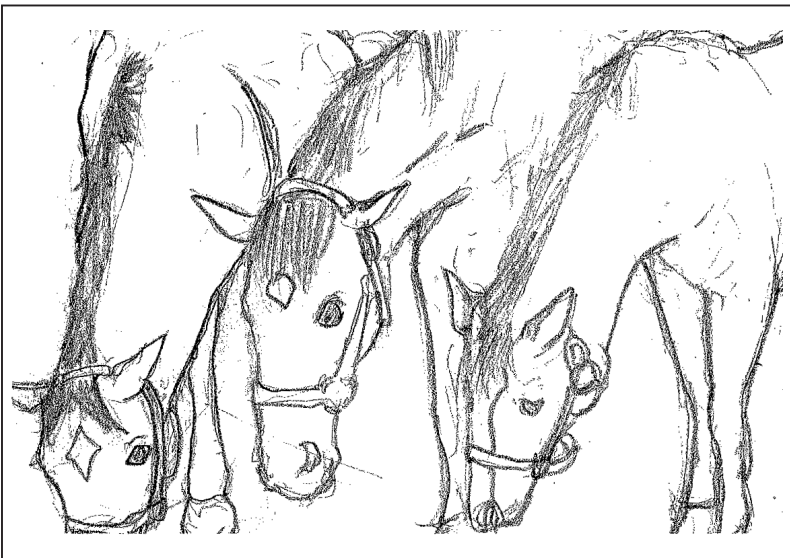
全然

絵の先生にメールで質問したりしている。

先生~~~~~
教えて~~~~~



過去問
まちがえては
公式テキストに
戻って...の
くり返し。



つていくと思います。
読んでくれてありがとうございます。
いました。

◆静岡県 坂部哲之 家族(70代)

「家族会で救われたこと」

(1)お互いに話をすることで、自

分だけ悩んでいるの
ではないということ
を実感できた。

(2)医療機関の情報交
換ができた(医師や
服薬等)。

(3)子供の状態を他の
家族の子供さんと比
較でき、対応の仕方
などを幅広く学ぶ事
ができた。

(4)先輩の会員からの
アドバイスに心が救
われた。

(5)家族会の外部機関
からの講話が参考に
なった。

(例) 成年後見人制
度など

詩・その他

◆神奈川県 谷岸輝美 (30代)

「生きがい」

人は悲しみがあると自ずと救い
を求める

人間は弱いもの

生きがいは生きていく上で無く
てはならないもの

私はそれを詩に求めようと思う
自分の気持ちを詩に託すとき

私は自然と素直になれる
心を清らかにすることができ

心を表現することで私は心に静
陰を取り戻せる

言うなれば悲しみをもたらし
た人の罪を許せるようになる

そして全てを許せるようになっ
たとき私はペンを置く

私の人生の終えんを迎える時が
やって来るのである

編集後記

編集後記

■7月からみんなねつとの職員として事務局に勤務しています。担当は家族による家族学習会の普及事業です。私は、1984年の宇都宮病院事件の時に、大学時代の友人から自分も宇都宮病院を訴えたいので、手伝ってほしいという相談を受けました。裁判は時間もお金もエネルギーもかかるのでやめたほうがいいといいました。何か縁を感じて精神科医療をよくしたいと思って全家連に入りました。それから34年たち、その間、さまざまな事業や運動にかかわることができました。全家連の時には、全国で取り組まれた作業所づくりや、精神保健福祉法の度重なる改正、PSW国家資格化や統合失調症への病

名変更などに家族会が大きな役割を果たすのを目の当たりにしました。ハートピアきつれ川では、当事者のやさしや苦勞を改めて知ることができました。全家連解散後のコンボでは、当事者のパワーを感じることもできました。家族も当事者も社会的な力を持っていません。ひとりでは無力で、医療・福祉の制度的不備や、人の目の冷たさや、孤立無援の絶望感にうちひしがれてしまいます。でも、そうした弱い一人ひとりが集まることで力に変わり、社会を変えることができます。という体験してきました。みんなねつとで、またそのような体験ができるのではないかと期待しています。よろしくお願いたします。

(桶谷)

【「みんなのわ」へメールで投稿できます】読者のページ(みんなのわ)への投稿がメールでできるようになりました。投稿のメールアドレスは minnanet.seishinhoken@outlook.jp です。※投稿される方は、氏名、住所、年齢、性別、(家族、本人、その他)をご記入ください。なお、ペンネームで投稿される方はペンネームをお書きください。

月刊みんなねつと 通巻第137号 (2018年9月号) 定価 300円

発行日 2018年9月1日 賛助会費(会費に購読料含む)
発行者 公益社団法人全国精神保健福祉会連合会 個人・年間 3600円
理事長 本條義和 団体・年間(お問い合わせください)
〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-46-13 ホリグチビル602
TEL 03-6907-9211 FAX 03-3987-5466
郵便振替 00130-0-338317 ホームページ www.seishinhoken.jp

印刷・製本/倉敷印刷株式会社

第11回全国精神保健福祉家族大会 in 兵庫
「精神疾患の本人と家族の明日を切り拓くために」

みんなねっと 兵庫大会

2018年 11月 26日 月

神戸ポートピアホテル 南館 1F ポートピアホール
(078)302-1111
JR 三宮からポートライナー線に乗り替えて市民広場駅下車直ぐ

全国大会 2日間通して手話通訳対応



11月 27日 火

神戸国際会議場 (078)302-5200
市民広場駅下車直ぐ

みんな
ねっと

県政 150 周年記念の
神戸港・史跡巡りできる
兵庫県大会へ！

この兵庫大会は、県政150周年記念の特認事業に決定しました！



平成30年、兵庫県は、成立150周年を迎えます。
この節目にあたり、ふるさと兵庫を再認識し、
新たな兵庫づくりを考える機会とするため、
当該事業を実施します。



絵／伊東久雄（家族）作

参加費 **3,000円** 障がいのある人 **500円**
学生 **1,000円** (高校生以下は無料)

兵庫大会事務局

〒651-0062 兵庫県神戸市中央区坂口通 2 丁目 1-1
兵庫福祉センター 6 階

兵庫県精神福祉家族会連合会

TEL (078)891-3871、FAX (078)891-3872

E-mail hyokaren@citrus.ocn.ne.jp (内容問合せ)



主 催：公益社団法人 全国精神保健福祉社会連合会（みんなねっと）
公益社団法人 兵庫県精神福祉家族会連合会（ひょうかれん）

協力：（一財）神戸観光局・神戸コンベンションビューロー